

## 『カルメン』はどのように作られているか : 脱神話 のための試論

末松, 壽

<https://doi.org/10.15017/9967>

---

出版情報 : Stella. 15, pp.49-69, 1996-07-01. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :



## 『カルメン』はどのように作られているか(6)

—— 脱神話のための試論 ——

末 松 壽

小説『カルメン』の恋愛におとらず重要なテーマとして、異人・異民族・異文化・異言語（「異・性」）の問題系があることを我々のはのべてきた<sup>1)</sup>。恋多きカルメンと他方におけるドン・ホセ、「私」、ガルシア、イギリス人士官、ルカス、連隊の中尉……とのかかわり、これらすべての異性関係はまた異・性関係のパラディグムでもある。それぞれの対を形成する男たちは、いずれも民族(国)や文化の差異(バスク、フランス、ジプシー、イギリス、スペイン)によって規定されていて、この差異がそれぞれのカップルを特徴づけ個別化するのである。その意味ではまず、二つの問題系は重なりあっているといえる。

しかし、それらは同等の資格で作品を織りなしているわけではない。第一に、その間には一方が他方を可能ならしめる条件となるのにたいして、その逆は真ではないという関係があるからである。そのことは、多様なカップルが二つに区分されることを考えれば容易に納得できるだろう。男たちのうちひとりガルシアのみはカルメンと同じくジプシーであり(異・性ゼロ)かつ夫であって愛人ではないという理由で特殊なのである。この例外的な事例は、反対に異・性こそ恋愛関係を規定するものであることを教える。我々はこうして、この小説がそれ自体に課している一つの規則を知ることができる。すなわち「恋愛は異人の間でのみ可能である」。じっさい、すべての恋愛関係は異・性という所与に基礎づけられて成立し、持続し、崩れていく。異・性は恋愛にとって不可欠の条件なのである。二つのテーマはそれゆえ同等に並びたつものではなく、前者が後者を条件づけるという一方的な関係においてある。第二に、これらの問題系の拡がりもまた異なることをつけ加えることができる。なぜならば、すべての異・性関係がエロースに還元されはしない。たとえば、一方の「私」と他方のドミニコ会士やアントニオ、またドン・ホセに対するガルシア

や「私」などはそれぞれ国民性の相違の問題を提起するものの、エロースの問題系には属さないからである。

さて、異・性のテーマの重要性の指摘（第二章，Ⅰ）につづいて、異・性の「構造」（Ⅱ）で観察したのはこのテーマの構成法であった。そこでは、特にこのテーマのもつ重層的な構造をしめし、それと作品の構成や語りのレベルとの係わり方を検討した。「未知なるものの既知への還元」（Ⅲ）での問いは、その文章レベルでの現れ方で、そこでは、とりわけ脚註をめぐる見たように書き手の仕事と語り手のそれとの関係（連結，継承，エコノミー）が明らかになった。のこされた最後の仕事は、このテーマが作中人物相互の関係においてどのように作用するのかを記述すること、つまり作品における異・性の機能を分析することである。

#### Ⅳ 異・性の機能

異・性とは遠隔（*éloignement*）とその意識に他ならないが、それは様々な人間関係のあり方を規定する。『カルメン』における異者たちは、たがいに次のようなそれ自体相関関係によって結びついた三とおりの対立，アムビヴァランスの形のもとに現れるように思われる。すなわち、軽蔑／魅惑，疎外／自己断定，騙し／共犯である。以下それぞれを検討しよう。

##### 1. 軽蔑／魅惑

往々にして人は見知らぬものや異なるものによって惹きつけられる。外国（人）暱負（*xénophilie*）である。ソロモンは異国の女を愛しその妻妾の数たるや千人にのぼったという<sup>2)</sup>。でなければ反対に反撥しあなどの。外国（人）嫌い（*xénophobie*）である。これらの情念の内に人種差別の源があることは論をまたない。このテーマは『カルメン』においてもしばしば現れる。旅人の「私」が複打時計を鳴らす癖があることはすでに指摘した。これは「私」が、スペイン人のいづく技術先進国にたいする驚異の感情を利用する行為であった。「なんという発明がお国にはあるのでしょうか！」とボヘミヤ人も感嘆して（いる振りを）みせる〔Ⅱ, 949〕<sup>3)</sup>。他方の「私」は、「ボヘミヤ人の間において魔術がどれほど高い段階に達しているかをしるのが楽しみだった」〔950〕と

その好奇心を表明している。「私」がドン・ホセにミルトン風の流瀟の悪魔をみるのも、正体不明の異人が発するなみはずれた魅惑の効果であろう。ボヘミヤ女の提供するという媚葉の話を「他愛もないお喋り」〔960〕として片づけようとした——任務への責任感からでた発言でもある——ドン・ホセが、当初は反撥したカルメンへの恋におちるのには、民族を異にした女の謎めいた魅力というものがあずかっていただろう。何人ものイギリス人と同様に、パイヨとしてひっかかる「私」にしてもそれは言える。「これは異様で野性的な美人だった。最初はいぶからせるが、忘れることのできない顔だった」と「私」は告白している〔951. 強調筆者〕。

第四章の記述は注目すべきである。先にジプシーにおける逆差別の選民意識を読みとった箇所、我々は今度は、いま問うているアムビヴァランスの集中的な表現をみることができる。まず、そこに指摘されているジプシーが抱かせるという相反しあう二つの感情、すなわち嫌悪 (aversion) と尊敬 (considération) は、軽蔑／魅惑のパラディグムに他ならない。それに対して、続くテキストはジプシーの側における他民族への軽蔑を証言する。

自分たちを知性に関して優れた (supérieure) 民族と感じていて、むかえいれてくれる民のことを露骨に見くだして (méprisent) いるのである。〔992〕

異人への軽蔑が、自己への優越感と裏腹になっていることはいうまでもない。

ところで一つ問うことがある。ジプシーが同時に相反する感情をひきおこすとしても、彼ら自身は他の民に惹かれはしないのか。同じ章はこの問いへのいわば答えとなる考察をふくんでいる。その発端、

ボロウ氏は、ジプシー女が自民族のそとにある男に少しでもひかれることはかつてあったためしが無い、と断言している。〔990〕

書き手はこれについて、「彼女らの貞潔さについて彼があたえている賛辞には大いに誇張があると私には思われる」と反論し、三つの事情をあげる。① 大部分の女が醜く、それゆえ貞潔が余儀なくされること——〈Casta quam nemo rogavit〉——、② (数少ないはずの) 美しい女はスペイン女性にとらず愛人の選択にきびしいこと。③ そして、美しいジプシー娘を金貨で釣

ろうとして失敗した男の話。これは、リベルタンのアンダルシヤ人が、ビタ銭ならうまくいったのにと云って反駁したという逸話で終わっている。こうして、ジブシーが異民族に性的にひかれることはないという主張にたいして作者は疑問を表明するのである。

異人にむけて人が露骨にみせる軽蔑の典型的なケースは、何といてもドミニコ会士の場合である。そこは少し丁寧に読まねばならない。

「ならず者は牢獄につながれています。これが小銭を盗むためにキリスト教徒に発砲しかねない男だとわかっていましたので、私たちは奴が貴下をあやめたのではないかとひどく心配していました」〔II. 954〕

もちろん、ドン・ホセが「ならず者」(coquin)よばわりされるについては、彼の所業、特に愛人殺害をはじめとする犯罪がすでに知られているという事情がある。けれども、いわゆるこの「ひとの良い」神父の言葉づかいの暴力性はそれだけでは説明がつかない。「私」の救霊のために何回も主の祈りや天使祝詞を唱えたというこの聖職者にとって、ドン・ホセはまるでキリスト教徒ではないかのようなその物言いなのである。「私」が男の名前をたずねた時の返事はどうか。

「これは国ではホセ・ナヴァロの名前で知られています。けどもうひとつバスク名もあって、それは貴方も私もけっして発音することはできませんまい」〔同上〕

スペイン語での醜名で十分であって、実名——文明人が、「キリスト教徒」が発音できないような野蛮な音——など覚えるに値しないのである<sup>4)</sup>。あるいはまた、バスク人はバスク人にすぎないのであって人格ではない。要するに「論外」、意識の周辺(marges)に弾きだされた人、異人である。これがスペイン人にとってのバスク人の定義である。

バスク人蔑視と裏腹に、予想されることだが、この人物のうちにはある種のショーヴィニズムも見られる。「エスパニヤでは」の表現に注目しよう。

「代官のところに一緒にしましょう。貴方のあの立派な時計をかえしてもらいま

しょう。これでもお国に帰って、エスパニヤでは司法がろくに仕事をしていないなどとおっしゃるでしょうか」〔同上〕

フランスでの自国の評判を気にし、自国の司法制度がよく機能していることをほこる発言である。バスクとは違ってフランスは価値判断の基準となるに十分に魅惑的なのである。この評判への関心はもう一步先にいく。

「この国での風がわりな事柄をお知りになりたいのですから、エスパニヤではどんな具合にならず者がこの世からでていくか、ぜひともお知りになるべきです」〔954. 強調筆者〕

この発言のおかげで、異人化作用にかかわる我々の先の定義にひとつの補充をもたらすことができる。というのも、神父は（バスク人の受けることになっている）鉄輪による処刑をスペイン「特有の事柄」（singularités）の一つとして「私」に見るようにすすめるのだが、自国の風習を「風変わり」と形容するということは、彼がある奇妙な倒錯によって、他者、魅了する他者の目で自己をみているという事実をあらわにする<sup>9)</sup>。この人物は、特殊者をつくる普遍者意識の慣例にしたがってふるまいながら、ただし、自分が普遍者と見なしている他人の目で自己をみることによって、ある意味で自己を辺境におくのである。魅惑する他者の目による自己の異人化である。この場合、神父にとっての規範がバスク人ではなく——これはあくまで疎外された存在にとどまる——、フランス人であるという点を忘れてはならない。異常化が魅惑と侮蔑の序列を構成する事実を再確認しよう。

ところで、上の二項対立は、そこに主体と客体の区別をもちこむならば、さらに分析的に記述することができるだろう。すなわち軽蔑する者／される者、魅惑する者／される者、の区別である。作用をうける側において異人化はどのような形をとるのか。これが次の問題である。

## 2. 疎外／自己断定

たとえ意図的でないにしても、他人が私の前で私にわからない言語で話しあう時とか、私のあずかり知らぬ事柄を説明もなしに語りあう時、私は彼らから除け者にされていると感じる。他者による異人化（aliénation）つまり疎外

感である。それが意図的になされるなら、そしてそのことが分かる時には、この仲間外しは敵愾心をひきおこす。カルメンとドン・ホセが「私」の前で、しかも他ならぬ「私」のことを話した時がそうだった。「パイヨ」という語しか理解できない「私」は男との格闘を覚悟していたし、男がドン・ホセだとわかった時も、かつてアントニオによる彼の密告の企てを妨げたことを後悔したほどだった。テキストはもっと直截に「彼が首を吊られるがままにできなかったことをちよっぴり後悔した」という〔II, 952〕。もちろんこれは状況からくる敵意であるけれども、それが自分のうけている疎外の意識と重なっていることも認めざるを得ない。

疎外はもっと恒常的でそれだけに厳しい形をとることもある。集団のなかでの文化的な共同性の欠如からくる特定個人ないしグループの疎外の場合である。前項で引用した「彼らがいだかせる一種の嫌悪感」が差別につながることはいうまでもない。たとえその嫌悪感には「尊敬」が裏腹になっているとしても、そのことはジプシーを異者として扱うことを妨げはしない。尊敬とは恐れでもある。この複雑な情念はジプシーが一種タブーをうたれた存在であることを暗示する。といっても、それはクリスト教的な意味での神聖をいうわけでは無論ない。それはこの放浪の民の全体としての疎外状況を表明する女主人公の珍しくおらしい言葉——「私」に会ってすぐの発言——が証言している。

「天国から二歩のところにあるイエスの国の方かと思いますが」

「まさか。天国なんて…この人々の言うことによれば、それはわたし達のためには無いのだそうです」〔II, 950〕

さて、このテーマがラディカルな形をとるのはドン・ホセにおいてである。この人物の意識を観察しなければならない。「我々ナヴァール人」というのがこのバスク男に特有の言葉づかいであったことを思いだそう。この表現は、彼への蔑視を集約的に暴露するドミニコ会士にとって「我々」なる語がもっぱら自分の所属する団体をさすのと類比して、ドン・ホセがバスクへの帰属をつよく感じ、死にいたるまでこの情念を捨てることがなかったことに対応する。事実、処刑をまえにした彼は、おなじ地方出身の聴罪司祭に告解したい意向をもらしている〔III, 960〕。この疎外されたバスク人においてこそ、我々はもっと

もよく差異性の自己断定を発見することができるだろう。

自分を他ならぬナヴァール人として把握するということは、他の人々に対する自分の差異をユニークで解消し得ないものと確信することである。彼の物語は流涕の悲哀とともに、もどることのできない故郷へのノスタルジー、その美化、そしてひるがえて自分や同胞とは異なる者たちへの反感、そして自国のものとは異なる物事への反撥、一言でいえば「故郷コンプレックス」ともよぶべきものをいたるところで見せている。

まず、それへの熱中のあまり喧嘩をして国をでざるを得なくなった「国技」であるボーム [III, 956]。山地にすむ同国人の頑健さと敏捷さ。「わたしら山の者は軍務をおぼえるのが早いのです。わたしはまもなく伍長になりました」 [同上]。あるいはまた、脱走しなかったこの伍長の「30 フィートもない高さの窓から街路におりることなど」何でもないと豪語 [963]、カルメンの脚を語るために援用する伝説的な「バスク人の脚」 [961]<sup>6)</sup> などの例は、彼の生活においてバスクが常に参照事項であることを示している。また「故郷の山地における天気の変わりやすさ」 [970] はカルメンの気紛れの比喩ともなる。そしてすでに暗黙に比較の対象になっている異人との相違――

勤務につくと、エスパニヤ人たちはトラムプをしたり眠ったりします。わたしはといえば、生粋のナヴァール人としていつも軍務に従事しようとつとめていました。 [956. 強調筆者]

ドン・ホセがスペイン人との差異として強調し、かつ自分が体現するというナヴァール人らしい勤勉さ、生真面目さである。

この生真面目さは、女性にかかわる態度においても一貫している。セヴィリヤの若者たちがタバコ・マニュファクチュアの女工たちにお手軽な誘いをしかけるのを見ながら、山男はその女たちを見向きもしない。そこには、彼における故国への思い、独特の服装や髪型をした故郷の娘たちへの懐古、そしてそれとの対比で生真面目でないアンダルシヤ女への「おそれ」 [957] つまり距離、拒絶が表出されている。「若い雌馬」を連想させるジブシー女の歩き方をめぐって彼がバスク/スペインの比較をすることについてはすでに指摘した。似たことはホセ・マリアに刀傷をつけられた女が「それだけいっそう彼を愛し

た」こと、その傷跡を自慢していたことについての彼のコメントにも現れる。曰く「女というものはそんなものです。特にアンダルシヤ女は」〔976〕。

祖国への愛はもちろん言語の問題におよぶ。まず、「私」も気づいたあの訛への言及、

私らバスク地方の者には訛があって、エスパニヤ人たちから簡単にそれと知られてしまいます。その反対に、彼らの誰ひとりとしてバイ・ジャオナと言えるようにはなれないのです。〔960〕

「私らバスク地方の者」(nous autres gens du pays basque) は、スペイン語を話せるが訛はこのころ——アイデンティティの痕跡——。ところがスペイン人はバスク語の〈Oui, monsieur〉にあたる語句をすら発音できるようになれない——怠慢もしくは無能さの証拠。こうして自国人の発音の「欠陥」すらショーヴィニズムの理由となる。ここには、少数民族はその間で生きていかねばならない多数民の言語を習得することを余儀なくされるが、逆は真ではないという周知の事実のひとつの説明、地方主義者の側からの解釈を読みとることができる。さてこの訛の故にカルメンは男の出身を見破る。そして「かなりうまくバスク語をあやつる」女は、男の母国語で彼に話しかける。言語上のナルシズム、あるいはいわゆるお国自慢とむすびついた言語観——

私らの言語はとても美しいのです。ですから外国でこれを聞こうものなら、私らは身震いしてしまうのです〔960〕——

の虜にとってその効果は靦面であった。

スペイン人がバスク人を異人化するのに対抗して、後者が前者を異人化しかえすことが以上より明らかである。そしてこの相互的な特殊化作用は、いずれもそれぞれの愛国心ないし自己礼讃、それと表裏をなす他者の拒絶とによって構成される。このディレマは、他に対する異者としての自己の同一性の肯定と、自己にとっての異者という意味での他者の同一性の断定との共存として説明することができる。アイデンティティとは差異である。そしてこの差異の確信にもとづいて自己については肯定が、他者については拒絶が選ばれる。ところで拒絶は軽蔑もしくは憎悪と不可分である。それはテキストが証言する。な

ぜならドン・ホセにとってアンダルシヤ人は口ほどのことはない。実際、軍隊におそわれた時、

なんでもかんでも殺してやるとほらをふくアンダルシヤ人たちは、すぐに情けない顔つきをしました。総崩れの敗走でした。〔974〕

そしてスペイン人に対する少なくとも潜在的な憎しみ、

もしもエスパニア人たちがわたしの国の悪口を言ったのだったら、ちょうど彼女がその仲間にしたようにわたしとて奴らの顔面に切りつけていただろうと思ったのです。〔961〕<sup>7)</sup>

さらに彼とガルシアとの決闘をあげなければならない。後者のとる「アンダルシヤ風の構え」／前者のとる「ナヴァール風」の構えの対比〔981〕は象徴的である。アンダルシヤ人の真似をしたジブシーはあえなく落命する。ここでガルシアのとる擬態は、何語でもはなし、従って何者にもなれるこの民における正念場にのぞんでのアイデンティティの欠如を象徴し、またこの戦いが一種の代理戦争でもあったことを暗示する。ナヴァールがアンダルシアを制したのである。

『カルメン』における自己の肯定／他者の否定にかかわるこれら全ての事例は、集団の中で形成され、集団を反映した意識であり行為である限りにおいて、文明を対象とした精神分析の指摘をもって説明することができる。フロイトはこう書いている。

文明集団はこの本能的な衝動にはけぐちを開く。この集団の外にあるすべての者を敵としてあつかうことによって。〔…〕近接し、類縁関係をもってすらいる共同体がたがいに戦いあざけりあう。<sup>8)</sup>

分析者はこの最後の現象を「小さな差異のナルシスム」と呼んだ。それは、『カルメン』では見られないケースだが、例えばエスパニア人／ポルトガル人、北／南ドイツ人、イギリス人／スコットランド人の関係に見られるという。現代では、不幸な事例をいくらかでも挙げることはできるだろう<sup>9)</sup>。もちろん『カルメン』の作中人物がおりなす敵対関係は、世界の状況にも似てけっし

て単純ではない。というのは、フロイトのあげる事例と同じレベルのもう一つの例（アンダルシヤ／バスク）の他に、そこには一種の全体とその部分（スペイン／バスク）の対立——こういう見方をドン・ホセは承認しないだろう——が重なっているからである。

バスク人におけるこのコンプレックスは、カルメンがつけこむ「弱点」となる<sup>10)</sup>。これを最後に見ておく。テキストはさらにバスク人における対セヴィリヤ、対カスティリヤの自己意識を暴くであろう。最初の一目ではバスク風の装いではなかったために彼の「気にいらなかった」〔957〕ボヘミヤ女が、エチャール生まれだと出身をいつわっていわゆる同郷のよしみに訴え〔960〕、自分のおこした刃傷沙汰の原因を民族の対立（セヴィリヤによるバスクへの辱め）に帰す説明——少数民族における憎悪を顕在化させる煽動——をする時、彼は自らこの憎しみをえらびとり、「彼女がひどいバスク語を話している」ことに気づきながらも女を「ナヴァール人だと信じた」〔961〕という。信じたかったのである。こうして、女が逃がしてくれるようバスク語で頼むと——

「もしあたしに突かれてあなたが倒れるなら、お国の人よ、このカスティリヤの新兵にはあたしを引きとめることはとてもできないでしょう」〔961. 強調筆者〕——

ドン・ホセは依頼をききいれてしまうのである。

以上は、異人化の対象となる被害者の側における疎外と自己断定のアムビヴァランスである。異人化はもう一方の加害者の側から観察することもできる。その時これは欺瞞／共犯の二項対立となって現れる。

### 3. 欺瞞／共犯

他人を意味交換の場から意図的に排除するに際して使われるのはいわずと知れた隠語もしくは異語である。これはかなりありふれた体験であろう。ヴォルテールとシャトレ夫人とが第三者に聴かれないよう英語で話すことがあったことはよく知られている。『カルメン』と同時代の『二十年後』にも例がある。マザランは、同席しているコンディ（レッス枢機卿）に知られないように、アンヌ・ドトリッシュをスペイン語で叱責する。けれども控えているダルタニャンはこの言語を解する<sup>11)</sup>。同じ状況ないしその変異体は、多言語に通じ外国滞

在も少なくなかったメリメのいくつかの作品において発見される<sup>12)</sup>。『カルメン』はこれを組織的に開発するであろう。まず、第四章の一節が説明しているその原理ともいうべきものをみよう。ジプシーの言語状況について語りながら作者は、

どこでも彼らは、自分たちの住んでいる国の言語を自分たち自身の言語よりも容易に話す。後者は、部外者の面前で自由に話しあうためにしか彼らはほとんど使用しない [993]

と書いている。軽蔑／魅惑という異国性の機能は一对一の、あるいは集団対集団の人間関係においても現れるのにたいして、ここでは三者の、そして時にはそれ以上の人物の関係が問題になる。そしてこれが二つのグループに分裂するのである。一方に共犯関係にある二人以上の者、他方にこの共犯性から除外された者である。後者は、引用文がいうように「部外者」(étranger: 異人)という用語をまとう。この構造は二つのグループへの分裂というより、ある大集団の内部におけるより緊密な連帯性で結束した小集団の形成と考えることもできる。

この三者の世界には二つの異なるコードが通用する。たとえば土地の言葉とそれにボヘミア語である。そしてそれぞれの言語でのコミュニケーションが作動するのであるから、分裂は二つの意味連関のあいだで生ずるということができる。三者を A, A', B とおけば、

A R A' / A R B, あるいは (A R2 A') R1 B

が成立する (R1 は土地の言語による意味連関を、R2 は特殊言語によるそれをあらわす)。A と A' はジプシーそして一般に共犯者たちをあらわす。三者とも土地の言語を理解する。ところでジプシーは固有の言語ももつのであるから、彼らにわからないことは発言されない。だがジプシーの言語はこの民にしかわからない。こうして内部コミュニケーションに用いられる時、ボヘミア語は一種の暗号として機能し、B をその意味流通の回路から除外する。B は A R A' 間のコミュニケーションにあずかり得ないのであるから、また容易に騙されもする。この時、B にたいする軽蔑がひそかにかつ露骨でもある攻撃性を

おびること、逆に疎外されるBが、その事実にきづくならばAらにたいして反撃に出ることは想像に難くない。

前稿でもふれた<sup>13)</sup>異国性のこの機能が、上に形式化したようなモデル構造を常にそのまま実現するとは限らない。三者ではなくて二者の関係が類似の様相を示すこともある。不完全な変異体である。煙のでるストーブをまじないで直してもらおうとした「異邦人」である百姓女をはめる (attraper) あるボヘミヤ女の話がそれである。

あたし、まっさきに太い脂肉のかたまりをもらったわ。それからロマニ語でつぶやくの。「お前さんバカね」って。「バカに生まれてバカで死ぬのよ……」。戸のそばまできて、あたしはちゃんとしたドイツ語でいってやった。「お前さんのストーブが煙らないようにする間違いのない方法は、火をおこさないことよ」。で、あたし一目散にげてやったわ。〔992. 強調筆者〕

二者の世界が、ジプシー+ドイツ女/ジプシーと二つに分裂していること（それぞれの言語はドイツ語/ボヘミヤ語）、共犯者が語れないこと、相関的に攻撃は、（ここに呪いを読まないとすれば）相手につうじないがゆえに効果のない悪口にとどまること、以上がこの状況の特殊性を構成する。

さらに二つの変異体を発見することができる。その一つはたぶらかしが半ばしか成功しない例である。前項の最後にあげた場面、カルメンをドン・ホセと共に連行する「二人のカスティリヤ人新兵」の不意をつく計略の場面〔961〕を構成する四人が二つのグループに分かれることは明瞭である。そしてそこでは、スペイン語の意味世界をバスク語を暗号とする小世界が内部から蝕んでいることもいうまでもない。この計略は功を奏してカルメンは実際に逃亡するが、欺瞞は不成功に終わる。計略の事実が見破られるからである〔962〕。欺瞞の機能不全ということが出来る。もう一つの変異体は共犯の機能が十分な成果をあげない状況である。ドン・ホセは語る。

ある日の夕方、わたしがドロテ〔…〕の家に行った時、カルメンはひとりの若い男を連れて入ってきました。それはわが連隊の中尉でした。「早く逃げて」と彼女はバスク語で言いました。〔970. 強調筆者〕

カルメンの暗号によるとっさの指示は、「驚き」そして「激怒した」ドン・ホセが動かないために実行されない。男と女の意識の連帯関係が成立する暇もなく二人の男はたたかう。似たことがすぐつづいてもおこる。中尉はたおれる。「カルメンはラムプを消した。彼女の言語でドロテに「逃げて」と言った。わたしも通りにとびだした」〔970. 強調筆者〕。この件にもわざわざジブシーの言語でという記載があるのだが、この状況ではドン・ホセを除外する理由はなく、したがって暗号の必要性もないという理由で共犯／欺瞞のテーマを語ることはできない。

完璧な構造の実現をみせて一分の隙もなくその効果を発揮する劇的な件は、カルメンとドン・ホセがイギリス貴族を手玉にとる場面である。ジブラルタルの町で、オレンジ売りに化けて恋人をさがしていたドン・ホセは、ある夕方、女の声によびとめられる。

イギリス人はかたことのエス・パニヤ語を話しながら、わたしに上がってこいと叫びました。マダムがオレンジを御所望だから、と。そしてカルメンはバスク語でわたしに言いました。「あがっておいで。驚いちゃだめよ」〔978. 強調筆者〕

三者の出会いそのものがすでに二つのコードによる二つのコミュニケーション世界の形成をつけている。あるいは一つの共通世界の中での共犯世界の形成を。スペイン語に対してバスク語がだましの言語として機能するであろうことも予想される。世界の分裂とはコードの分裂であり、世界の対立とは言語の抗争なのである。

ドン・ホセは客間に案内される。

カルメンは早速バスク語でわたしに言いました。「あんたエスパニヤ語はひとことも知らないのよ。あたしのことも知らないの」。それからイギリス人の方に向けて言いました。「いった通りでしょう。すぐバスク人ってわかったわ。へんな言葉をお聞きになれるわ。この人、なんて愚かな風采なんでしょう。戸棚のなかで見つかった猫みたい」〔978〕

お分かりのように、三人の人物は次のような配置を見せている。

- { カルメン+イギリス人 (+ドン・ホセ) (コード：スペイン語)
- { カルメン+ドン・ホセ (コード：バスク語)

「あんたはエスパニヤ語は知らないの」というカルメンの言葉は、まさしく共犯性の確立、有無を云わさぬ契約の締結をいみする。もちろん、これは演技としての契約であって、実はバスク人にはスペイン語が分かるのであるから、この言語をひとことも喋らないとはいふものの、彼にとってカルメンとイギリス人との意味交換にはいかなる秘密もない。第一章で「私」から「読まれる」人であったドン・ホセがここでは読まれずして読む立場にある。だがそのことはドン・ホセに特権のみを与えるわけではない。なるほど、彼はその男に気づかれずして——男は彼がスペイン語を解するとは思っていない——その男のことは全てわかる。全知である。ここにカルメンと連帯したドン・ホセのイギリス人に対する欺瞞の根拠と優越がある。けれども、バスク人はスペイン語を「知らない」のであるから、ライヴァルに分かるようなこの言語による発言も禁じられている。契約は拘束する。彼は無力である。類比したことは、バスク語を知らないイギリス人についてもいえる。彼には、もう一方の世界で自分がどう扱われていようと、全く何もできない。知の欠如による無力である。カルメンのサディズムとはまさに、これら二人の男のそれぞれの弱点につけこんで、イギリス人の方はバカにして楽しみ、嫉妬に怒るバスク人の方はからかって楽しむところにある。

一部分を例としてあげよう。「お前のイギリス貴族様」を「マキラ」で叩きのめしたい、とドン・ホセがバスク語で言った時、イギリス人は、(ちょうど「私」がパイオなる語だけを知覚したように)「マキラだって、それ何のことだ」とたずねる。

「マキラというのはね、とカルメンは依然として笑いながら言った。オレンジのことなの。オレンジのことをいうのにまったく変な言葉でしょう。この人、あんたにマキラを食べさせたいんですって」〔979〕

「契約」に従って両言語に通じるたった一人の特権者による「翻訳」〔978〕である。その一石二鳥の効果について注釈しておこう。「マキラをたべさせる」

(faire manger du maquila) ——この部分冠詞はもともと一本二本と数えられるものをあたかもなにか物質の塊、たとえば一定量のオレンジか何かのように量化する——という隠喩（マキラを食らわせる、とドン・ホセなら訳すだろう）はイギリス人だけには通じない。彼は笑われているのである。しかし同時に、「まったく変な言葉」（un bien drôle de mot）という表現はバスク人の言語ナルシズムを標的としたからかいに他ならない。その意味ではこの共犯性の小世界には一つの内部対立、分裂もあるといえる。場面の緊張を高めるこのいわば墳めこみによる同一構造の重複は、テーマ構成の上からは一連の類似した状況の中での差異ともなっている。

少数民族の言語が秘密の言語となること、そして異・性の大きい人物が双方の世界を支配し、それを楽しむという事実を確認しよう。この手法は先に指摘したこのテーマの段階的構成をまさに逆転した形で作動させることに他ならない。第四章の一節をもって結びとしよう。

ボヘミヤ人たちはいかなる国のものでもない。いつも旅をしているのであらゆる言語を話す。彼らの大部分にとっては、ポルトガルでもフランスでも、バスク地方でもカタロニヤでも、どこでも自分の故郷である。ムーア人やイギリス人相手でも分かってもらえる。〔960〕

あなたには彼らが分からない。彼らにはあなたのことが分かっている。これが外人／同国人の関係において現れる欺瞞と共犯の弁証法の原理でもあり帰結でもある。

## 結 論

『カルメン』を一篇の恋愛小説としてしか読まない人にとってエグゾティスムは、異・性処理の手法が恋物語のあたえる喜びを妨害しないなら、その限りにおいて、物語にある種の色をそえるものとして承認できるだろう。ところで、我々がであった頻繁な外国語の使用、異国の事・物・言語についての解説や脚注の介在は物語の興味をそぐ障碍になってはいないだろうか。いや、物語の流れを断つのはそれだけではない。構成そのものからして、ドン・ホセとカ

ルメンの出会いから両者の死にいたる経緯は、学者の考証をまじえた別種類のテキストによって囲いこまれる。カルメンは中央に位置する二つの章においてしか登場しない。「私」のカルメンやドン・ホセとの交渉は、後二者の物語といくつかの接点をもつとはいえ、「恋愛小説」である後者を報告するための「本当らしさ」の枠、巨大すぎる枠をつくることになる。「私」との出会いが彼らの生活、運命にわずかでも変化をおこしたのだろうか。結局二人は別のところで「私」とは別様に生きたのではないかとすれば、二人の恋愛にとって「私」とは何だったのか。第四章の追加は、ロマンスあるいは悲恋の物語にとってなじみの悪い余計なお喋りにすぎまい<sup>14)</sup>。恋愛の物語は、第三章だけではないとしてもせいぜい最初の三章につきている。これのみを『カルメン』の名で指示するという事故が作者自身にすらおこったことを我々は知っている〔IV, 994〕。語り手の「私」は、説話の責任者であるにおとらずまた談話の人であって、あるいは「読者」に話しかけあるいは異物を解説するのだが、いずれの場合においても物語つまり事件の展開を中断させる。さらに作者が欄外に注釈の書きこみをおこなう。こうして、純然たる説話は幾とおりにも別性質の言説によって包囲され隔離されあるいは切断される。

『カルメン』の読みはしばしば恋愛を作品の本質とし、以上のような様々の事実を作品の欠陥ないし雑夾物とみなした。そもそも当事者が優れて異・性の具現者であって、その恋愛もこの限定のなかで展開するという根本的な事実を無視したように思われる。恋愛小説『カルメン』とはしたがって、ひとつの抽象的な読みによる構築に他ならない。それも一つの読みではある。だがそれは、読みたいところだけの恣意的な抽出であるとの謗りをまぬがれないであろう。カルメン神話のいわば「模範」であるビゼの『カルメン』がそういう読みであった。それは書き直しであり、作品から生まれた別の作品である。この神話に浸ったまま読みを続けるのではなく、むしろこれを解体することが我々には必要と思われた。なぜか。

それはメリメの『カルメン』は別のカテゴリーに位置づけるのが適当だからである。あるいは少なくともそうすることができる。このカテゴリーを名指すことはなかったものの、我々は小説の方法を記述することを通じて実質的にはそれを証明したと思う。命名をおこなう時である。マリオンとサロモンは書いている。

『カルメン』を読んで驚くのは、メリメがその女主人公の民族上の特殊性、「エジプトの務め」、ボヘミア人の習俗、彼らの言語、彼らのくだけた言い回しをどれほど強調するかということである。『タマンゴ』や『コロムバ』においてそうだったように、彼はある民族上のタイプを描写しあるいはむしろ再構成しようとする。<sup>15)</sup>

このことは、我々の試みた記述によって明らかであろう。こうして作品は一つの「民族誌小説」(roman ethnographique)と命名され得る。もちろん、上の引用がいうようにジプシーの重要性はいうまでもない。しかし、バスクやスペインをはじめとして、フランス人やイギリス人もまた記述の対象になっていることを忘れてはならない。それに、これらの民が力動的な関係とりわけ抗争の関係において描写されるということも。

『カルメン』の作者についてのいわゆる「未来を方向づける」——天才の苦渋にみちた特権——ことはない「孤立した」「二流作家」<sup>16)</sup> といった類の判定をどう考えようか。彼らの批判する欠陥にもかかわらずカルメンという女が一つの「神話」になったとすれば、まさにその神話のなかで作品を読むのである限り、一貫した批評はこの作品こそが神話を開始したという事実を忘れるべきではなかっただろう。それに幻想文学作者としてのメリメも忘れるわけにいくまい。怪奇小説『ロキス』(1869年)は勿論として、夢をしたがって下層意識を探る『デュマーヌ』(1873年)を「超現実主義」の先駆とする見方もある<sup>17)</sup>。他方この小説作家にはあまり知られていない別の多くの顔があって、文学史はそれを十分に凝視したとはいえない。膨大な書簡の作者、古美術の研究者(著書や論文のほかに、文化財保護にかかわる幾多の公式の報告書がある)、歴史家、そして本稿でまったく言及することがなかったロシア文学研究者<sup>18)</sup>……の顔である。強調はすまい。それにそもそも批評の仕事とは序列を決定することなのか。

批評のくだしたかに見える評価を性急すぎるとしながらも、ロマン派のなかでの、そしてエグゾティスム文学の中でのメリメの孤立ということは、トラアールとは別の意味で肯定することができると筆者は考える。なぜならば『カルメン』は小説の新しいジャンルの可能性を、少なくともその一つの方向を先駆けて示す試みであったからである。「一つの方向」と我々は言う。すなわち別のひょっとしたら可能な方向の否定である。これを最後に記しておかねばな

らない。

外人は分からない。外国の事は分からない。外国語は知らない。この時、人・事物・言語は異・性をまとう。異常化される。分からないものは理由もなく美しく見える。でなければ恐ろしい。恐ろしくなくするためにはどうするか。翻訳し、説明し、注解をする。こうして異物は同化される。彼方は此方に変えられる。謎の美も謎の恐怖も飛び散る。読者はこちら側で、自分のところで安心していけばよい。むこうがこちらに連れてこられる。こちらの知に消化されてこちらの知となる。彼岸は消滅する。読み手は、ベッドに寝転びあるいは安楽椅子に体を埋めて待てばよい。いや、知ることが食べることである筈はない。私にはせいぜい軽い好奇心があれば上出来で、たとえ「エジプト」やその他諸外国の事柄についての煩わしい解説に目をとおしたところで、どうせ一瞬後にはこれも放念している。

私は彼方には行かない。彼方の内部には入らない。彼方の人と共に生きることはない。そもそも私には何人もの代理者がいる。読者の私を代理する作品内の「読者」、「読者」を代理する「私」、「私」を代理するドン・ホセである。ブルジョワの美德（損得勘定）が崇高な女によって攻撃される――

あたし、もったいぶる人って嫌い。あんた、最初の時は何かもうけがあるかどうか知らないままあたしにもっと大きな手助けをしてくれたわ。昨日はあんたはあたしに取引をもちかけたのよ〔III, 969〕――

としても、この「美德」をこえた世界への境界をあなたや私がまたぐわけではない。代理の代理のそのまた代理が彼岸にいざなわれたにすぎない。ドン・ホセのためらいつつの徐々の逸脱、「普通人」の生活からの逸脱を空想上でたどるだけで我々は無事に放免である。我々は保護されている。あなたや私は放蕩しない。墮落しない。ジプシーの知識は私を変えはしない。私はジプシーにはなれない。

市民、普通人ではないことの難しさ。私ではないことの難しさ。民族誌小説はすべてこの方法に従うのか。別の方法はないのか。読むということがそのまま、サルトルがいう意味での説明すなわち異・性の解消や同化<sup>19)</sup>を拒むことであるような、そして異人と共に生まれ異人として生きることであるような、私

の異人化が要請されることであるような、したがって異世界に同化されることなくしては読み得ないような危険な文学の方法は。

## 註

- 1) 本研究のすでに発表した部分の枠組みは次のとおり。

序

### 第一章 語り

- I 構造 1. 小説のコミュニケーション, 2. 談話/説話, 3. 「我々」  
4. システム (1)

- II 手法 1. 時間性, 2. 第四章 (2), 3. 接近

### 第二章 異・性

#### I 事実

- II 構造 1. 段階的構成 (3), 2. 「私」, 3. ドン・ホセ, 4. カルメン

- III 未知なるものの既知への還元 1. 本文での処理 (4), 2. 脚注での処理,  
3. 処理ゼロ (5)

以上については、(1) 山口大学独仏文学研究会「独仏文学」第12号, 1990年, 11-32頁, (2) 山口大学文学会「文学会志」第42巻, 1991年, 71-85頁, (3) 山口大学独仏文学研究会「独仏文学」第14号, 1992年, 1-18頁, (4) 山口大学文学会「文学会志」第43巻, 1992年, 117-132頁, (5) 九州大学フランス語フランス文学研究会「ステラ」第13号, 1994年, 1-20頁を参照されたい。

- 2) ソロモン「多くのことくにのおんなを寵愛せり […] つまひめみや700人, おもひもの300人あり」(『列王紀』上, 第十一章, 1, 3)。
- 3) MÉRIMÉE, *Carmen*, II, in *Théâtre de Clara Gazul. Romans et Nouvelles*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1978, p. 949. 『カルメン』及びメリメの諸作品の参照は、ことわりがない場合この選集による(以下 TRN と略)。
- 4) ベルーに赴任した副王のスペイン中心主義的な発言と比較することができる。「地方の名はええと……とんでもないインディアン名だが……なんでインディアンはみんなエスパーニア語を話さないのか」(*Le Carrosse de Saint Sacrement, saynète*, in TRN, p. 220)。
- 5) 社会諷刺や文明批評がこの異常化の手法を開発してきたことはよく知られている。『ペルシア人の手紙』、『ランジェニユ』、『西欧の誘惑』を思いだそう。モラリスト・デュフレニの作品は注目に値する。「Imaginons-nous qu'un Siamois entre dans Paris. Quel amusement ne serait-ce point pour lui d'examiner avec les yeux de voyageur toutes les particularités de cette grande ville?» (DUFRESNY, *Amusements sérieux et comiques* (1699), in *Moralistes du XVII<sup>e</sup>*

- siècle, éd. J. LAFOND, Paris: R. Laffont, coll. «Bouquins», 1992, p. 1003).
- 6) バスク人は「走るのが得意」というのは、フロベールのいわゆる常套観念である。 Voir FLAUBERT, «Basques», in *Le Dictionnaire des idées reçues*, Bordeaux: Le Castor Astral, imp., 1990, p. 14.
  - 7) 歴史家メリメもバスク人の「勇敢で独立的な」また「大胆で好戦的」な、あるいは伝統をおもんずる性格を強調している (*Histoire de Don Pèdre I<sup>er</sup>, roi de Castille* (1848), Paris: Marcel Didier, 1961, pp. 100-101 et 250)。
  - 8) FREUD, *Malaise dans la civilisation* (1929), trad. franç. Ch. et J. ODIER, Paris: P.U.F., coll. «Bibliothèque de Psychanalyse», 1971, p. 68.
  - 9) それぞれの歴史的な事情を捨象すれば、イギリス人/アイルランド人、ルーマニア人/ハンガリア人、ルアンダをはじめとするアフリカ諸国、中東諸国、(*La Guzla* の著者が 1827 年にとりあげた) ボスニア、南/北朝鮮、インドネシア/東チモール、シンガル人/タムル人……らの関係は周知のとおり。
  - 10) あるスペイン人ガイドについて『エスバニヤ書簡』第四 (1830 年 11 月) の著者はこう書いている——「私は彼の弱点 (son côté faible) である地方主義的愛国心 (patriotisme provincial) をつこうと考えた」(*Lettres d'Espagne*, IV, TRN, p. 594)。
  - 11) DUMAS, *Vingt Ans Après* (1845), in *Les Trois Mousquetaires/Vingt Ans Après*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962, p. 1182.
  - 12) 例えば, *Il Vicolo de Madama Lucrezia* (制作 1846 年, 出版 1873 年) ではフランス語がイタリア語世界で暗号として機能し, しかもそこで, 『カルメン』でも見ることになる意図的な誤訳がなされる (TRN, p. 1013). *La Chambre bleue* (1866) ではフランスでの英語。ただしこれは暗号として通用しない。「部外者」がイギリス人であったからである (TRN, p. 1035). *Lokis* (1869) ではリトゥアニア語世界のなかでのドイツ語 (TRN, p. 1052)。
  - 13) 我々はすでに同じ状況 (I. 947, II. 951-952, 952-953, III. 966) を指摘した。前掲拙論 (5), 17-18 頁参照。
  - 14) このような「判決」の例はメリメ研究の大家たち Pierre TRAHARD, *Prosper Mérimée et l'art de la nouvelle* (1923), Paris: Nizet, 1952, 3<sup>ème</sup> éd., pp. 20 et 39; Maurice PARTURIER, «Notice» de *Carmen, Romans et Nouvelles*, Paris: Garnier Frères, 1967, t. II, p. 342 に見ることができる。
  - 15) Jean MALLION et Pierre SALOMON, «Notice» de *Carmen*, in TRN, p. 1561.
  - 16) Pierre TRAHARD, *op. cit.*, p. 52.
  - 17) 詳しくは Jean MALLION et Pierre SALOMON, «Notice» de *Djoumane*, in TRN, pp. 1650-1653 参照。なおフランス 19 世紀前半の代表的な幻想小説をあつめた Daniel MORTIER (éd.), *Récits fantastiques* (Paris: Presses Pocket, 1992) は, ノディエ, バルザック, ゴティエの諸作品とともに『イールのヴェヌス』『ロキス』を収録している。

- 18) Cf. MÉRIMÉE, *Études de littérature russe*, éd. H. MONGAULT, 2 vol., Paris : Librairie Ancienne Honoré Champion, 1931–1932.
- 19) SARTRE, *Qu'est-ce que la littérature?*, Paris : Gallimard, 1948, p. 117.